



文化財愛護シンボルマーク

第2号

平成15年2月1日発行
岩沼市教育委員会
TEL 0223-22-1111
岩沼市桜1-6-20

岩沼市文化財だより

ふるさと岩沼

岩沼市文化財保護委員長 高橋 鼎

私たちは常に「ふるさと」と共にある。岩沼に生まれ育ちまた生活の場を得た者にとって、岩沼が「ふるさと」である。

私たちは日常、時には岩沼のことを改めて見つめ直し、または思い出して懐かしく思うひと時がある。そしてこの地のことをよく知りたいと思うことがある。ふるさとの歴史や文化は私共

の誇りであり自慢にもなる。

よく「ふるさとを愛せ」と言われる。それにはまず「ふるさとをよく知る」ことが必要で、「知る」ことが「愛する」ことに結びつくものと確信する。

さて岩沼は、今から三千年以上昔、海が退き阿武隈川の河口が伸びて大部分は氾濫原となつて、縄文時代の人々が千貫の山地や志賀、長岡地区の西部に住みついた事が知られている。古墳や縄文遺跡が発掘され、この地に生活した人々の生活用具が発見されて、

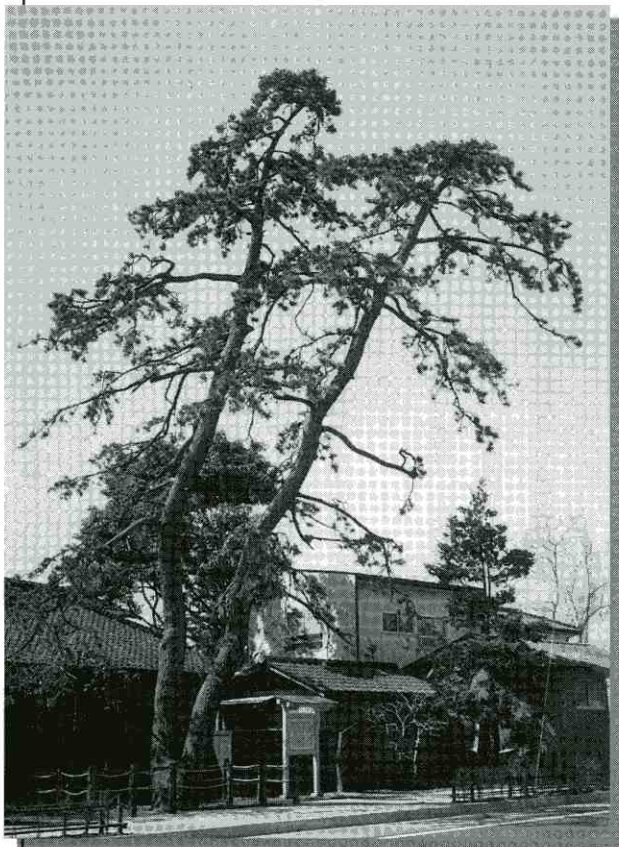
現在、資料室（岩沼公民館内）に陳列されて当が偲べる。

歴史の古い郷土の誇り竹駒神社の社殿再建復興工事の際、掘り起こされた貝の巣穴の化石鑑定から、この辺一帯の地質が、二百万年ほど前にできた山下層からなることが分かった。このときに調査された仙台市科学館の佐々木隆主幹は、二百万年ほど前の岩沼は海で、深さは二十メートルよりも浅い潮間帯であつた、と推測されている。

その昔岩沼は、「武隈」と称していたが、何時頃から岩沼と言われたかははっきりしないと言う。二説あるがいずれも伝承で証拠はない。また、阿武隈川河口に国府が置かれていたとも言われるが、これも証拠が発見されていない。

室町時代に鶴ヶ崎城が築かれてより数多くの領主が住した。岩沼が太平洋に面し、阿武隈川が流れ、交通の便がよくて住みよく、産業、商業が興り、城下町、門前町、宿場町として栄えてきた歴史がある。

今、これら先人達の築いた貴重な足跡を掘り起こして、文化財として後世の人に遺したい。



二木の松(武隈の松)

市指定文化財

昭和44年5月29日指定

二木の松（武隈の松）

岩沼市文化財保護委員 千葉 宗久

二木の松は、古代から陸奥国の歌枕『武隈（たけくま）の松』として親しまれており、詠歌の多いことで屈指の名木である。

この松は二木二丁目八五の一に所在し、昭和四十四年五月二十九日に岩沼市の文化財として指定を受けている。

この松にかかわる有名な歌人は次の通りである。

○藤原元良（ふじわらのもとよし）

「植ゑし時 契りやしけん武隈の

松をふたたび あひ見つるかな」が、

現在においては初見で、平安時代の

「後撰和歌集」（九五一年源順ら編）

にある。

陸奥の国守として二度目に赴任した

時に、かつて植ゑ継いだ松を再び見る

ことができたという出会いの喜びを

詠った歌である。

○橘季通（たちばなのとしみち）

「武隈の 松は二木を 都人 如何

と問はば 見きと答へむ」は「後拾

遺集」（二〇八六刊）にある。

武隈の松を見た感想はと問われたら、私は確かに見てまいりました。しかしそれは二木ではなくて三木でしたよという歌意である。

○能因法師（のういんほうし）

「武隈の 松は此度 跡もなし 千とせを経てや 我は来つらん」と詠んでいる。

平安時代中期の歌人であり、陸奥の国を二度訪れているが、二度目の東下りには『武隈の松』がなくてさまよったらしい。

○西行法師（さいぎようほうし）

「枯にける 松なき宿の 武隈はみきといひても かひなからまし」と

「山家集」にある。

平安時代末に、西行法師も『武隈の

松』を尋ねたがなかったようである。

藤原清輔の「奥儀抄」にあるように、

橘道貞が植ゑ継いだ四本目の松を、孝

義が伐つて橋杭にした後だったかも知

れない。

○宗久法師（そうきゅうほうし）

「都の苞」に「たけくまの 松の

木陰に たびねして 木の間の月に

心をつくし…」と記している。

南北朝時代（南朝年号）の正平六年

（一三五二）、宗久法師がこの地を訪れた時には誰かが五本目の松を植ゑ継いだらしい。それも木の下に旅寝して月を眺めるまでに成長していたようである。

○松尾芭蕉（まつおばしろう）

芭蕉は元禄二年（一六八九）の五月四日（新暦では六月二十日）にこの地を訪れ、「桜より 松は二木を 三月越し」と詠んでいる。

「新訂おくの細道（角川文庫）」には、「江戸発足以来三月に及んで、君

（挙白という者）がせつかくあつらえてくれた遅桜の候は過ぎてしまった

が、桜よりも何よりも、武隈の松こそは、古歌に読まれた二木のみごとな姿

を、三月ごしに、たしかにこの眼で見

ることができたことだ」と評釈に記さ

れている。

○まとめ

二木の松は江戸時代の書物にも数多

く紹介されているし、伊達五代藩主の

吉村公は二木の松を仙台封内三十名勝

の第一に挙げている。また、昭和にな

っても知る人ぞ知る岩沼三名松の一つ

でもある。ちなみに岩沼三名松とは、「二木の松、鼻輪の松、東平王の松」

である。

二木の松は、長い年月の間には野火で焼けたり、橋杭として切られたり、枯れたり、烈風で倒れたりしたが、代々植ゑ継がれてきた。

現在の松は七代目に当たり、岩沼町の呉服商仲間万吉氏が玉浦地区二の倉の松を植ゑ継いだものであると言われている。

この松は最近元気がないが、近い将来に樹勢を復活して、かつての端麗な姿を見せて欲しいと願っている。

名木「二木の松」をいつまでも大切に残していきたいものである。



▲ 明治35年撮影の「二木の松と歌碑」（岩沼市史より）

伝承 長谷古館と墓守り

岩沼市文化財保護委員 阿部 昭平

岩沼市南長谷字蛭の南麓に、長谷古館があります。近くに旧千貫小南長谷分校があった処です。

ここにお住まいの長谷 隆氏の案内で、古館の規模や構造についてお話を伺いました。

それによりますと、丘陵一帯の高さは約十五m位の平山のように今の地形からは、昔日の様子は見えてきませんが、東西一二〇m、南北一〇〇mにも及ぶ丘陵に館があったと伝えられています。山頂には平場があり、ここが本丸跡で本丸を取り巻くように外壕内壕があったようです。北東部一帯は昭和初期の国道建設にともない、土取り場として使われたそうですが、この辺りが往昔の二の丸跡だと思います。

「仙台領古城書上」には、長谷城として、東西二十四間、南北二十二間とあります。

さて、この長谷古館の主ですが、長谷紀伊守景重と言われていますが、長谷 隆氏がその末孫ではなく、館の主

の墓守りとして代々受け継いで今日に至ったと言います。また、景重の出自についてははっきりしないそうです。

隆氏の親族で、岩沼市桑原に住む長谷誠氏にも、お話を聞く事が出来ました。

誠氏が小学生の頃(昭和十一年前後)原因はわかりませんが、大きな茅葺きの母屋が火災に遭ったこと、長持ちには槍や刀があったこと、旧姓は小野か千葉を名乗っていたこと等が断片的に覚えておりましたが、長谷姓になった経過はわからないそうです。

長谷紀伊守のものと伝わる墓が近くの鷹観寺にあります。本堂右の坂を登ると見えてきます。年代は天文二年(一五三三)巳年と読み取れましたが、後奈良天皇の室町時代の後期のものと思われる。墓碑銘から戦国期の武将とも豪族ともとれます。

また、郷土史家の紫桃氏の伝える処によりますと、遠田郡田尻町百々地区に、長谷氏の遺跡があると言いますので、是非訪ねたいと思っています。



長谷古館跡(県遺跡番号一五〇二〇) 遺溝についてのメモ

■所在地

岩沼市南長谷字蛭九五

■時代

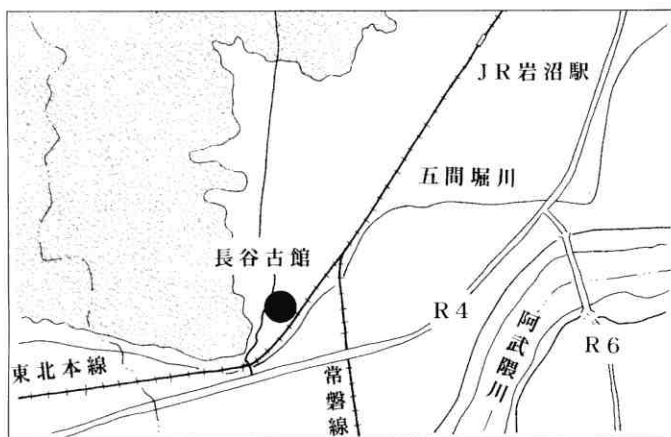
室町・安土桃山時代

平坦面と空堀が認められる。

分校跡地が二の丸、その西の一段高い平坦面が本丸、本丸の西側が約一〇mの崖になっており、三の丸に続くと考えられる。

本丸と三の丸の間に幅約五mの空堀の一部が認められる。

刀剣なども出土したという話もありますが、詳細は不明です。



位置図



全城図

碑めぐり手帳(二) 彰孝碑

岩沼市文化財保護委員長 高橋 鼎

玉浦寺島地区に存在する『日月堂』の参道脇に立つ碑の一つに、「彰孝碑」という碑がある。碑面には次の様に彫りこまれている。

従六位勲六等四竈仁爾題額

喜太郎

名取寺島ノ農夫ナリ家貧蚤ニ孝ヲ以テ聞ユ父疾厚シ喜太郎衣帶ヲ解カス侍養備ニ至ル而シテ戴上ノ心亦厚シ故ニ諸税時ニ先シ之ヲ納ム其人為想フ可シ郷人嗟稱シ事以聞ス安永二年十一月二圓金ヲ賜フ

名取寺島農夫九平治

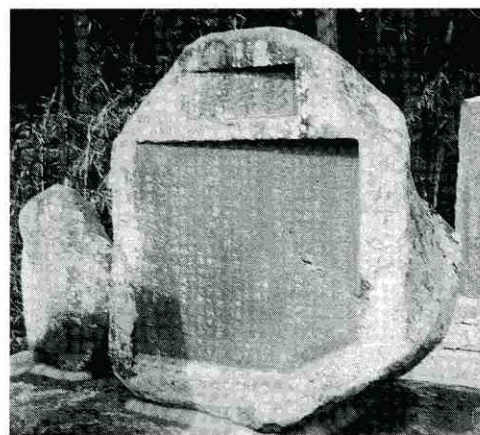
性質直ニシテ善ク人ト交リ諸税期ヲ愆ス其子喜太郎孝ヲ以テ人ノ稱スル所タリ蓋シ九平治平素教導ノ致ス所ナリ安永二年十一月子喜太郎ヲ賞スルノ日乃ニ方金ヲ賜フ

吾力里ニ欽慕スヘキ人物アリ安永ノ頃喜太郎父子德行アリ藩主伊達重村公ヨリ稱サレン事舊廳ノ文獻ニ見ユロ碑ニ喜太郎屋敷喜太郎蘭場ト言フアレト其ノ跡定カナス甚タ遺憾トス茲ニ相儀リ舊仙臺藩士四竈老臺ニ題額ヲ請ヒ其ノ表彰文ヲ刻シ以テ傳フ

昭和八年一月

名取郡玉浦村寺島區 戸主会

青年会



碑文を解説すると次の様になる。

喜太郎は名取寺島の農夫である。

家は貧乏だが早くから孝行で有名であった。父の病気が重い時でも喜太郎は衣服を脱がないで、傍について世話を十分に行なった。そして、お上に対する心もまた厚かった。それで、色々な税金をいち早く納めた。

其の人柄の素晴らしさが想像つくだろう。郷里の人たちはこのことを感心して褒め評判した。安永二年（一七七三）十一月に二圓金を褒美に下された。

名取寺島の農夫九平次は性質が素直で他人と善く交際し、色々な税金の時期を間違えなかった。その子の喜太郎は孝行者と人が褒め称えた。それはきつと九平次が普段教え導いたからであろう。安永二年十一月に子の喜太郎表彰の日に当たって二圓金を褒美に下された。

わが郷土に敬慕すべき人物がいた。安永の頃、喜太郎父子の道徳にかなった立派な行いがあった。藩主の伊達重村公（仙台藩第七代）から褒め称えられたことが古い役所の書類に見られる。世間の言い伝えに、喜太郎屋敷、喜太郎蘭場（墓地）というのがあるが、その跡ははっきりとは分からない。甚だ残念である。ここに皆で相談して旧仙台藩士の四竈老先生に、額に書き記すことをお願いし、その表彰文を彫刻して後世に伝える。

たからであろう。安永二年十一月に子の喜太郎表彰の日に当たって二圓金を褒美に下された。

わが郷土に敬慕すべき人物がいた。安永の頃、喜太郎父子の道徳にかなった立派な行いがあった。藩主の伊達重村公（仙台藩第七代）から褒め称えられたことが古い役所の書類に見られる。世間の言い伝えに、喜太郎屋敷、喜太郎蘭場（墓地）というのがあるが、その跡ははっきりとは分からない。甚だ残念である。ここに皆で相談して旧仙台藩士の四竈老先生に、額に書き記すことをお願いし、その表彰文を彫刻して後世に伝える。

昭和八年一月

名取郡玉浦村寺島區 戸主会

青年会

この彰孝碑（孝行を世にあらわす碑）は、仙台叢書のうちの「仙台孝義録」から採られたものであろう。（碑文・旧庁ノ文獻二見ユ）

この本は、十三代藩主伊達慶邦の命を受けて、嘉永三年（一八五〇）に大槻格次らによつて編纂されたもので、内容は歴代藩主に褒賞された人たちを取り上げたものである。この碑文中の喜太郎・九平次も褒賞された人であった。

褒美の二圓金は二両（平凡社大百科事典）、「一方金」が「方形の金貨で一両の四分の一に当たる」（諸橋轍次著・大漢和辞典）とあることから、「二方金」は一両の半分である。（東北歴史資料館文書研究科による）

その頃の一両で、米一石（一五〇キロ）が買えたという。換算すると現在の五万円以上の価値がある。十万円、こんな大金を藩主から褒美に貰ったことは、郷土の人たちにとって誇りでもあったし、自慢の種だったに違いない。親に孝行することは大変な美德であった。

碑の題額（額に横書き）を揮毫された「四竈仁爾」という人は、文久三年（一八六三）生まれで宮城師範学校卒、何と十八歳で亘理郡鹿島小学校長に就任。明治十七年に県特選生として文部省音楽取調所（当時）に入学、十八年に県師範学校教諭となり、長年にわたり音楽教育に携わった。大正十二年に盲啞学校校長となり十年間勤め、昭和十六年（一九四一）に七八歳の長寿を全うして逝去された。（宮城県風土記）

民具 下駄履物

岩沼市文化財保護委員 伊藤 礼子

先日、桑原一丁目の残間さんに何う機会がありました。市の広報に掲載された「民具をお貸し下さい」と言う呼びかけに応え連絡下さったとのこと。

その中に花嫁さんの履物もあると言うので同行させて頂きました。

ハレの日の履物

昔の結婚式は、収穫後の寒い季節で、式は花嫁の生家へ花婿と親戚代表が初めて正式に訪問する事（見参）から始まりました。請け書の取り交わし等の後、花嫁道具を牛車に積んだ行列は、親戚、縁者、近所の人々に送られ嫁ぎ先に向かって進み、哀調に満ちた長持ち唄が謡われました。

荷物を引く牛の角にも紅白の布が結ばれハレの日に相応しい装いであったと言えます。

館下一丁目の狩野明子さんは、そのような光景を昭和十五年頃に志賀から小川の間で見たそうです。

また、昭和二十三年に槻木から岩沼の橋本履物店に二十歳で嫁いできたき

み子さんは、仙台で髪を結い着付けをして木炭で走る車で槻木へ戻り、岩沼では、竹駒神社前の門前に中宿をとり、そこから仲町まで歩いたと言います。その時の履物は、黒漆に金蒔絵で鶴が描かれ、鼻緒は織り柄のある紫の綴れでした。

この度、後継者がなく店を閉めるに当たり、橋本履物屋さんから市教育委員会に寄贈されたのは、その時の履物です。

寄贈品には、仙台一高の応援団で履いたという足駄も添えてありました。

残間家からお貸し頂いた履物は、去年百三歳で亡くなられたヤシヲさん（明治三十三年生まれ）用のものではなく、すでにそれ以前から家にあったという豪華なものでした。（写真一）



▲ ハレの日の履物(写真1)

普段の日の履物

岩沼の下駄・履物店は、明治から大

正初期にかけて五軒、その後昭和三十年代には、七軒ありました。

当時の街並みの道路の高さは、商いをする店の入り口より低く、土の上に砂利を敷いただけの造りでした。履物は、その日の天気によって左右され、晴れた日は歯の低い駒下駄、雨の日は、泥漥でも歯が抜きやすい中歯、高歯が履かれました。

普段の履物は、汚れた時は洗い、下駄の歯の差し替えや鼻緒のすげ替えも普通のことでした。足に馴染んだ履物は、最後まで履ききって終には風呂の薪にして始末しました。（写真二）

これは、山で弁当を使う時の箸と同じで、自分の体の一部のようにして用いた物を処分する時に共通した、穢れを忌む気持ちがあつたように思われます。

結び

下駄の台には桐や杉、歯には樫や朴の木が使われました。庶民の下駄着用は、江戸中期以降と言われますが、履物と係わりの深い交通が頻繁になるのは、明治になり各藩の境界を廃してからです。その後も、殆んど人は、普段は素足に草履で、下駄は大切な履物

でした。

昭和二十年代下駄の材料となる桐の木は、村田や志賀の農家に買いに行つたそうですが、橋本履物屋さんでは、屋敷の中にも植えてありました。また、丸太を木取つて二つ割にし、ミヨのように積んで乾燥させる風景も見られました。

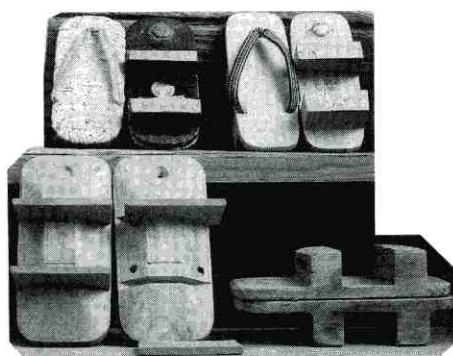
今は、忘れられた風俗や風景ですが、女子の出生を祝つて樹木を植え生育を見守り、やがて用材として使った先人の知恵は、履物を通して伝えられています。

参考文献

「忘れられた日本の風景」

東北大学付属図書館

「いわぬまさんぼ道」第180号



▲ 普段の日の履物(写真2)

平成十四年度 文化財めぐり報告

市教育委員会生涯学習課では、文化財に対する知識の向上と保護思想の普及を図るため、市民の方を対象に、年二回「文化財めぐり」を開催しております。

今年では以前から見学の要望が多かった松島町の文化財を六月と十月に見てきました。

両日とも天候に恵まれ、三十人を越す市民の方々に参加していただきました。

松島町では、国宝瑞巖寺、観瀾亭、五大堂、円通院を見学してきました。今回の見学地の目玉である瑞巖寺は、鬱蒼とした杉並木の参道の奥にあり、奥州随一の禅寺として有名です。

現在の建物は伊達政宗公が一六〇九年に再建したもので、伊達家の菩提寺になっております。

桃山建築を代表するもので、国宝に指定されている本堂と庫裏、重要文化財に指定されている御成門からなっています。

当日は、瑞巖寺の職員の方に、冗談を交えながら丁寧な説明をしていただき、参加者も熱心にメモを取りながら見学してきました。

県指定文化財の観瀾亭は、松島月見崎に伊達家の御仮屋御殿として建てられたもので、五代藩主吉村公によって観瀾亭と命名されました。

文禄年中に豊臣秀吉公から伊達政宗公が譲り受けた伏見城の一棟で、江戸の藩邸に移築したものを更に二代藩主忠宗公がこの地に移したと伝えられています。

観瀾亭の縁側では、松島湾の景観を楽しみながら抹茶で一服されています。



▲五大堂前にて(10月7日撮影)

た方もおられました。

参加者からは、個人ではなかなか分かり得ない所まで説明していただき、大変勉強になったと大好評でした。

近年の急速な開発行為などによって、先人達が残してくれた貴重な文

化財が失われつつあります。

今年も文化財保護の一環として「文化財めぐり」を開催する予定です。今年も参加できなかった方は、是非ご参加してみてください。

岩沼市教育委員会 生涯学習課からのお知らせ

① 第二回文化財企画画展「道具が語る庶民の暮らし」

内容 主に明治から昭和初期にかけての先人達の暮らしぶりを、当時使われた道具や写真などで紹介します。

期間 平成一五年三月四日～九日まで

入場 無料

場所 岩沼市民会館中ホール

※詳細については市の広報で

② 「文化財だより」の原稿募集!

内容 岩沼に伝わる古い風習、伝統、歴史的な話などについて原稿を募集します。

募集 四〇〇字詰め原稿用紙二～三枚程度

※詳細については市の広報で

③ 「岩沼郷土かるた」の販売

内容 遊びを通して市内の名所や旧跡等を知ってもらおうと「岩沼郷土かるた」を作りました。購入をご希望される方は、販売窓口にて直接お買い求めください。

販売 生涯学習課、市民会館、中央公民館(里の杜)、西公民館、玉浦公民館、図書館、総合体育館

価格 一セット＝八四〇円

ご意見・ご感想をお待ちしております。

岩沼市教育委員会生涯学習課
内線(五七三)